

踏み込んで、仏法を凌駕してくる自然の情感や感動をいう歌の解釈が提示される。人としての「心」を捨てた求道者でさえも突き動かす不可思議な衝動を捉えた作品とならう。

そして、どうしてそのようなことが起こったのかという問いかけが、下句の読みに対しても影響を与えるようになる。そもそも「秋の夕暮」の本意は「寂しさ」であり、それをどう表現するのかで歌人の力量が示される。下句の「鳴」については、「鳴の羽掻き」とその羽音に注目して和歌では詠まれてきたが、寂寥感と連接する素材では決してなかった。「鳴」を「秋の夕暮」の本意として詠むのは伝統的な美意識から逸脱している。さらには「鳴」の生態そのものにも注目して、それが羽音だけでなく、その鳴き声が囁しく、また群れる習性があることから、鳴の群れが一齐に飛び立つ時の騒がしき、轟音が下句にはイメージされ、その群れが飛び立った後に残る対象的な静けさを表現しようとしていたとの説に展開していく。このような読みは、現代の西行和歌研究の先端に位置するものであり、合理的・客観的な分析から導き出された答えなのであつた。

ところで西行の読みの歴史を考える場合、いくつかの特徴的な点がある。そのひとつは、絵の中に落とし込んでその歌を読み味わおうという態度であり、『西行物語絵巻』はその代表的なものであろう。必ずしも西行に限ったことではないが、西行について特に意識的に行われてきたことであつた。西行が、歌を詠もうとするその瞬間を捉え、絵画化した作品も多くつくられてきた。この歌については「鴨立沢之図」として、ただ一羽、沢より飛び立つ鴨のモーションが描かれることが多く、それはおそらく孤独とかが止まったかのような静寂さを歌に見ているように思われる。

私自身、研究者としての立場から、群れ立つ鴨のざわめきを詠んだという説を支持してきた。しかし歌人でもないものが和歌の世界に立ち入って、その用例（いわゆる歌語・歌ことば）や、鳴の生態的特徴から和歌を一語一語解体・分析するかたちで歌意を定めていくこうとする姿勢は、一理あるものの、一方で「もののははれ」という詩情そのものへ迫ることができていないのではないかとの思いがある。和歌の表現としても「鴨鳴く沢」でなく「立つ」としている点、歌の眼目として改めて留意されよう。

そしてもう一つ西行の場合に重要なことは、できるだけその歌が詠まれた場に立ち会って理解しようとする感覚が強いということだろう。「鴨立沢」といった絵図も、歌が詠まれたその場に立ち会おうとする意識から生まれてきたものであろうし、そのような意識の行き着く先には、大磯の鴨立庵のような、具体的に歌を詠んだ場そのものをイメージしようとするのであろう。西行歌の読みの核心には、歌が詠まれた場や状況にできるだけ近づき、そしてその情景を自らの眼で確かめ、体験しようとする態度があつたのではないかと考えている。

鴨立庵にある「鴨立つ沢の秋の夕暮」の歌碑は佐佐木信綱の筆によるが、信綱は、「大磯鴨立庵にて建碑式の日」に、その地で「風のおと汐さぬの音松かげに立ちついたらば聖きまさむか」（『秋の聲』）と詠む。風の音、潮騒、松陰といった環境設定・サウンドの中で西行がやって来るのではないかという感覚にとらわれている。信綱が、鴨立つ沢にて西行が歌を詠むその瞬間まで夢想したのかはわからないが、このような設定は、鴨立つ沢の歌の情景にも連結して新鮮な読みを与えていたのではないだろうか。